



スケートボードのセクションを作る

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

探究するなら楽しいことがしたい。
 スケートボードのセクションを自分で作って、滑ることができたら楽しいと思ったから。

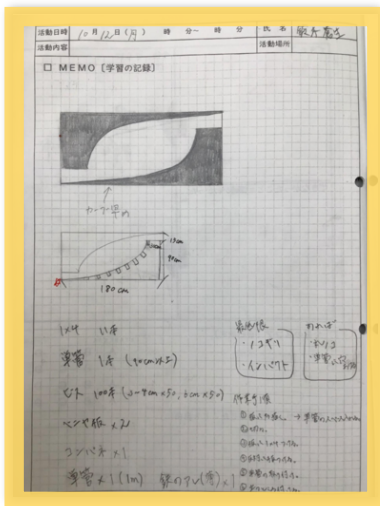
セクションの
 完成イメージ



【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・何を作るか、置き場所の確保、材料の確保、道具の確保などやることが沢山あった。緑のふるさと協力隊の中原さんや担当の先生には本当にお世話になり、形にすることができた。
- ・セクションを作る際は丸鋸を使用するのが一般的だが、今回はほぼ全ての作業をのこぎり一本で行った。特に曲線に切っていく作業は悪戦苦闘した。
- ・セクションが完成するまで探究は終わらない。別のセクションも作ってみたい。

【実施写真】





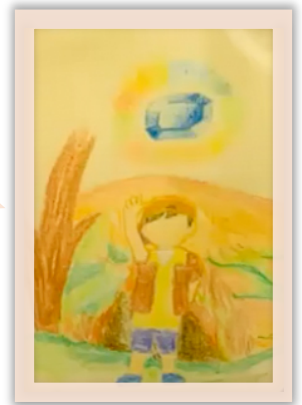
オリジナル物語と夢

～心に届く一冊を～

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

- ・将来、小説家になりたい。
- ・物語のテーマ「大人とは」「本当の自分とは」を決めた理由は、昔から答えのない問いを考えることが好きで、この機会に自分の中で整理したかったから。

物語の主人公の
イメージ



【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・クラスメイトや大人に「あなたはどのような人物を大人だと思えますか」をアンケート調査し、たくさんの人の考え方に触れることができた。大人は今までの経験と知識を生かして具体的に話しており、高校生は一般的に考えている憧れの性格が多かった。
- ・山形県在住の作家さん2名にインタビューし、作品を作り上げる楽しさや伝えることの難しさ、自分の考えをはっきり持つことの大切さを感じた。「やりたいことを欲張って挑戦して良いよ」「自分の考えを持つこと、難しいことを柔らかく伝えること」とアドバイスをいただいた。
- ・現在も執筆中。作品完成まで探究は終わらない。
- ・この物語で伝えたいことは、見えているものは人それぞれであること。他人が持つ自分のイメージと、本当の自分自身。人は誰でも宝石を秘めている。それは、自分自身にしか磨くことができない。それを磨き続けた先に【真の自分】がいる。

【実施写真】

物語のあらすじ

記憶を失った少年留衣^{るい}は、夢の中で汚れた宝石を見つける。宝石を見つけたことで、様々な世界へ行くことができるようになる。少年は、失った【記憶】と【本当の自分】を取り戻すために旅に出た。ひよんなことから謎の男性と出会い、その男性を追うことになった。そして、少年は『自分とは何か』という疑問を永久に問い続けることになる。少年の前に立ちはだかったものとは…。



声に出したら叶っちゃった

～1日限定カフェを開いてみて～

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

小国町におしゃれで人が集まれる場所が少ないなと思ったので、「わたしが作りたい」と思ったから。正直何から始めたらいいのかわからなかったが、地域の方に「人と協働することが大切」とアドバイスをいただき、料理系をテーマにしていた愛花(No.9)と一緒に道の駅で1日限定カフェをやることに決めた。



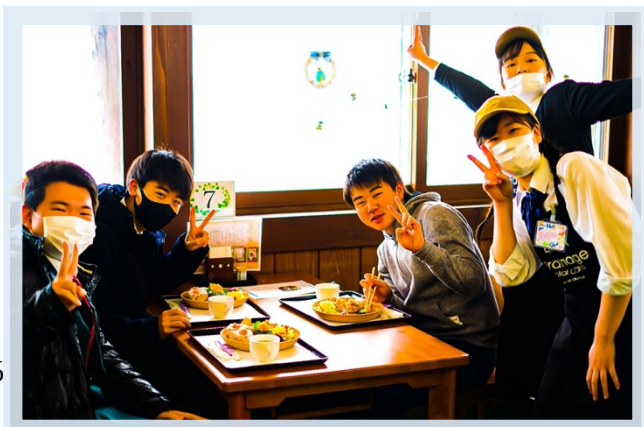
カフェ当日は40食
完売！

【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・やるって宣言することが一番大切だと感じた。最初は正直、授業だからやっている・やらされているという感覚だったし、目上の方と協働することの難しさにモチベーションが下がることもあった。でもカフェをすると宣言した時、周りの人が「絶対食べに行く」「楽しみにしている」と言ってくれて、その期待があったから最後までやり遂げることができた。周りの人の支えが、私のモチベーションを保たせてくれた。
- ・カフェ当日は40食が完売。終わった後は、もっとやりたいと思うようになった。
- ・自分たちの声でこんなにも沢山の人が協力してくれて、とても驚いたし、プレッシャーも大きかった。そこで自分たち二人だけで全て背負わず、周りの大人に頼ること、自分の気持ちを声に出すことが大切だと感じた。
- ・プロジェクトが山形新聞に掲載され、たくさんの人に声をかけて頂き、みんなが私たちの活動を見てくれるのが嬉しかった。その記事を見た山形大学の方からお声がかかり、小国の食材を使ったお弁当を共同販売するチャンスを得た。
- ・将来は接客をする仕事をしたいので、この活動は私の夢の第一歩になった。沢山の人の人と関わり、協働できたことで多くの学びがあった。

【実施写真】

クラスメイトもお客さんに



カフェ当日の調理室の様子





新サッカースタジアム構想

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

- ・小国町にあるサッカー施設「あいべ」について調べてみることにした。サッカーが大好きで、日頃から試合を見たりサッカーに関する情報を集めたりしているから。
- ・(出身である) 飯豊町にはあいべのような施設がないから、このような施設を提案したい。

小国町サッカー施設
“あいべ”



【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・町体の方に話を聞きに行ったら、あいべを建てるにあたって皆さんの熱意が凄く伝わってきた。次は飯豊町の役場などに話を聞きに行って、スポーツ施設のことを調べていきたい。
- ・あいべで出来るスポーツは、サッカー・野球・ウォーキング・テニス。年間利用者数は約 1,000 人（夏は約 400 人）とのこと。サッカークラブ Yui (ゆかいに！運動で！いきいきライフ!) という名前のサッカークラブがある。
- ・建築費について。建てるのに約 3 億円かかったと聞いて驚いた。施設はお金がかかる。サッカーだけの専用施設となるとなかなか難しい。小国町や飯豊町のような雪国では、屋外施設が冬季の間使用できない。
- ・歴史について。今の小国小学校の前は以前ボーリング場があり、それを取り壊したら小国町民の運動場所がなくなったため、今のあいべができた。ちなみにあいべが建つ前は、その場所に病院があった。
- ・あいべのイベントは、夏休みのドッジボールなどのスポーツ教室があるほか、カーリンコン大会といった生涯スポーツの大会も開催されている。
- ・「あいべ」は山形弁で「行こう」と誘う時に使われる言葉。「みんなであいべに行こう」という意味が込められている。

【実施写真】

あいべの 1 階は人工芝アリーナ、2 階は観客スペースとなっている。





多くの人に視聴される

ゲーム実況動画を作るには

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

- ・ゲームをするのが好きで、YouTubeでゲーム実況動画をよく見ている。その中で、視聴回数が多い動画と少ない動画があり、その違いはなんだろうと疑問に思った。その違いを探るために、探究をしようと思った。
- ・ゲームは障害の有無や年齢に関わらず、楽しむことができる。多くの人と共通の話題で話せるのが魅力的だと思ったから。ゲームにも良いところがあるのを伝えたい。



視聴者に見やすい
字幕も研究

【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・実践1でゲーム画面録画・編集した動画をYouTubeにアップし、Twitterでお知らせした。6/11-7/27まで毎日投稿を続け、チャンネル登録数17人、総再生回数726回。
- ・実践2で改善点（動画にストーリー性がなく、声なしの実況で視聴者が飽きてしまう）を反映し、機械声を入れ実況できるようにした。その結果2月時点でチャンネル登録数73人、総再生回数2,300回まで伸びた。
- ・実況している人の努力がわかった。多くの人に見てもらうには長く続ける忍耐力、同じ内容にならないようにネタの多さが必要だと知った。

【実施写真】

見てもらうのに必要なことベスト5

1. **人気のゲーム**をする
2. **タイトルやサムネ**などを面白く作る
3. **編集**などで見やすくする
4. **声の掛け合い**で面白く作る
5. **とにかく継続**して動画を上げる





無くなってしまったイベントを復活させる

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

- ・少子高齢化が進んでいると聞いて、私でも何かできるのではないかと思ったから。
- ・イベントを通して人と関わる大切さや楽しさなどを学べるから。このイベントを通して小国町のことを少しでも知ってもらいたい。

復活させたい野外フェス“コネクト”



【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・アンケート調査やイベント企画を通して、改めて人と関わること、自分から発言することの大切さが分かった。
- ・昔のコネクト主催者に話を聞き、以前の会場に実際に足を運び、現状の課題を把握した。
- ・県外の人や学生にアンケートをとり、その結果（回答 79 件）をもとにイベントのイメージを作った。来年の実施に向けて会場のセッティングを手伝ってくれる大人の人や同じ高校生でイベントと一緒に手伝ってくれる人を募集中。

【実施写真】

企画①

ステージを作って音楽・ダンスができるようにして、来た人が飽きない企画にする。

音楽（若者でも分かる曲）を聴きながら飲み食いする。高校生で1つ出店し、お酒が飲めない学生も楽しめるようにする。小国町のことを知れるように1つブースを作る。

企画②

（前回と同じく）餅つきを取り入れ、人との繋がりを感じてもらう。





英語の小国高校パンフレット作成

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

- ・英語が好きだったから。
- ・小国高校は修学旅行と留学の2つで外国に行く機会があり、英語のパンフレットが活かせると思ったから。

まず日本語のパンフレットが完成！



【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・まずは日本語のパンフレットが完成。作ってみて、パンフレット作成の難しさ、周りの人との協力の大事さを感じた。これから日本語のパンフレットを英語に訳していく予定。
- ・小国高校の資料を見て、知ってもらいたい行事を考えた。普通の高校ではできない特別な行事である「全国小規模校サミット」「外国への修学旅行」などをパンフレットに盛り込む。
- ・小国高校 ALT のブライアンにインタビューを実施。小国高校に来て驚いたこと、小国高校の魅力を聞いてみた。
- ・ブライアン「小国高校に来て、伴走の文化に驚いた。先生たちが一生懸命に生徒のやりたい！をサポートしてくれることにびっくりした」「小国高校の魅力は、少人数で自由。一人一人に役割がある」「日本とアメリカの学校の違いは、アメリカは“教室は先生のもの”、日本は“教室は生徒のもの”という感覚がある」

【実施写真】

ALT にインタビュー





ダンスイベントを開催したい

【プロジェクトに取り組んだ理由・背景】

- ・一誠・颯斗(No.3)ともにダンスが好きだったため共同で探究。
- ・ダンスの楽しさを広めたいが機会がない
→作ればいい。

みんなが楽しめる
空間を演出



【プロジェクトを通して学んだこと】

- ・イベントの参加を募る時は、相手に「自分にもできるかも」と思わせるような伝え方をすることが大事。
- ・1回目のアンケートでは、何曲もある選択肢の中からランダムで音楽を流し、踊れると思う人がパフォーマンスを披露するダンスバトルイベント企画の参加希望者を募った。結果は、ダンスバトルという名前のハードルの高さが要因で、踊りたい人がいなかった。
- ・どうすれば興味を持ってもらえるか、参加しやすくなるか考えたところ、小国高校にはヲタ芸パフォーマーがたくさんいることを思い出した。ヲタ芸（サイリウムダンス）メンバーに参加してもらうことでハードルが下がり、2回目の参加希望者アンケートでは踊りたい人が12人まで増えた。
- ・学園祭の前日と当日にイベントを開催。ダンスの楽しみ方はたくさんあり、ヲタ芸・音ハメ・歌詞ハメ・オリジナル・即興など様々なジャンルが参加。みんなが楽しめる空間を作り出すことができた。
- ・自分が好きなものを楽しんでもらうために、本当に大切なことは難しく考えさせないこと。伝え方を工夫すると、のり気では無かった人ものってきてくれる（例えば、バトルという言葉イベントという言葉に変更する）。
- ・この経験を生かして伝え方を工夫し、色々な人たちにダンスの楽しさを広めていけると思った。

【実施写真】

